

その手すりは、みんなで支えている

丸亀市立西中学校3年 三木 晴佳

私は今年で九十歳になる一人暮らしをしている曾祖母がいます。大きな病気もせずとても元気な人ですが、最近は足腰が弱くなってきて、自分のことが少しづつ不自由になってきていました。「最近お風呂に入るのが怖いから入れていいない。」と娘である祖母に相談があつたようです。

夏休みに久しぶりに曾祖母の家を訪ねるとお風呂に手すりがついていました。曾祖母は「安心して毎日お風呂に入れるようになってうれしい。」と喜んでいました。リフォーム会社で働く父が工事をしたそうです。「介護保険を使って工事をしたんだよ。」と聞いて「介護保険って何だろう?」と疑問に思い、調べてみることにしました。

介護保険とは、高齢者や体の不自由な人が安心して生活を続けられるように、国や市町村が支援する制度です。今回の手すりの工事の他にも、介護士さんが自宅を訪れてお世話をしてくれたり、デイサービスに通ったりすることができます。こうしたサービスにはたくさんのお金がかかるのですが、介護保険を使うことで、かかる費用の多くを助けてもらえます。曾祖母のお風呂の手すりは、要支援の階級でかかる費用の一割負担で工事できたようです。

では、この介護保険のお金はどこから出ているのでしょうか。調べてみると、四十歳以上の人たちが払っている「保険料」とみんなが納めている「税金」によって成り立っていることが分かりました。つまり、今元気に働いている大人们が、お金を出し合って支えが必要な高齢者を助けているのです。

日本では今、少子高齢化が進んでいて高齢者の数がどんどん増えています。私の周りにもおじいちゃんやおばあちゃんが施設にいるという友達が何人かいいます。そういう人たちにとって介護保険はとても大切な制度なのだと感じました。そして、その制度を支えているのが、私たちの税金なのです。

今回、曾祖母のことで介護保険を知り、自分にも関係がある身近なものだということを知ることができました。しかし、学校で「介護保険って知ってる?」と聞いたら、ほとんどの人が「知らない」と答えました。確かにサービスを使う側の曾祖母でさえいざ使うまでは、その存在を全く知らなかったそうです。でも、これから日本はどんどん高齢者が増えていき、介護を必要とする人も増えていきます。だからこそ、一人でも多くの人に介護保険のことを知ってもらいたいと思いました。身近に介護が必要な人がいる家庭でも知らずに困っている人がいるかも知れません。その人たちにとって介護保険の存在を知ることが大きな助けになると思います。

税金は、ただ納めるだけのお金だけではなく、こうした大切な制度を支えるために使われていると知った上で、私は将来社会の一員として支える側になりたいです。